

脳・肉体を超える場としての意識

齋藤 忠資

我々はすでに脳死が確認された患者の臨死体験の事例や、先天性全盲者が臨死体験では体外離脱して周囲の状況を正確に捉える視覚を備えている事例(1)や体外離脱後に①臨床死が確認されている。②五感では直接知りえない情報をキャッチしている。③その情報が想像して当てることができないような特異な内容である。④その情報が正確であることが、後に確認されているという4つの条件を満たすような臨死体験の事例を考察した。(2) これらの事例は、いずれも脳と肉体を超えた意識が存在する可能性を示している。

④ 場としての意識：体外離脱はいかにして可能か？

では、いかにして意識は脳と肉体を超えることができるのか？一元論ではどうして意識が肉体から分離して意識だけが非物理的な超意識界に移行するのが説明できない。二元論では、意識と肉体（物質）が一体になり相互作用できるのかが説明できない。そこで第三の道として意識を多次的に振動するエネルギーの場と捉えて、磁場が磁石を取り巻いているように肉体を取り巻いてラジオタやテレビのように同調するとみるモデルが考えられる。このモデルでは、多次的に振動するエネルギーの場である意識は共振することによって、脳と肉体を超えて遍在することができる場（非局在化）と考えることができる。場自体は人間には知覚できないが、物体に作用して初めて人間に知覚できるようになる。この知覚できない場に、共振・同調することによって我々は場を知覚できるようになる。場自体は一つでも、場が作用する物体は多様なので、現象も多様になる。意識は多次元の振動するエネルギーの場なので振動数をアップさせることで、より高い次元の振動するエネルギーの場へと移行し、脳と肉体を超えた超意識へと拡大・上昇し、万物を包む宇宙意識と一体になることができる。脳・肉体の意識が、脳・肉体を超える超意識になることは潜在的可能性である。また脳は、意識を生み出す器官ではなく、意識の場と作用して意識を受信する装置であり、その意味でテレビの受像器に似ている。意識の場があれば、磁場が磁石と作用しているように、身体と作用することが可能であろう。

- ① H.margenauによれば、場は物質ではないが物質が存在する時にのみ意味を持つ場（物質的な場）と物質の存在が意味を持たない場（量子力学や相対性理論上の場）がある。
(3) 意識は物質性と質量を持たず、空間上限定された位置を持つ必要もないという点で、場の性格を備えている。意識に一番近いのは量子論の確率の場であり、意識は物質学上のエネルギーの場ではないので、意識は脳（物質）とエネルギーを供給することなしに量子のトンネル効果によって相互作用できる。(4)
- ② このH.margenauの説を受け入れ、さらに展開したのがJ.Ecclesである。J.Ecclesによれば、物資ではないの意識は意図という仕方で補足運動野のニューロンに作用して、

脳と身体に働きかける。(5)非物質的な意識が物質の脳をコントロールするメカニズムは、シナプスにおける神経伝達物質の放出の過程で機能する量子論の確率の場である。シナプスの小胞のエキソサイトーシスは、ハイゼンベルクの不確定性原理の範囲内でエネルギーを含んでいるので、量子決定の結果を決定することによって、意識は脳に作用することができる。(6)

- ③ B.Libet は、脳の相互作用する統合された意識を伴う精神場を提唱し、これが統一された主体的な経験の基になっているという。しかし、脳と精神場の相互作用は J.Eccles の説とは異なる。J.Eccles の場合には、メンタル機能のユニットとしての psychon が、特別なニューロンの集合体である dendron と関連しているが、B.Libet は、psychon のシナプスの機能への作用に依存してはいないという。(7)

その他意識を場として捉える説を挙げてみよう。

F.A.Wolf は、意識を潜在的な可能態の振動している場とし、不可視で非物質で超知性を備えた生きた魂が、磁場が物体に作用するように身体内で作用していると見ている。(8)

A.L.ランスキーも、意識を 3次元物体(肉体)に作用する 5次元の力であり、統合する場であると見ている。(9)

振動するエネルギー場としての意識：臨死体験の事例

肉体に制約を超えて拡大した後は、自己意識のエッセンスは振動する未知のエネルギーの場であったと臨死体験では証言されている。

代表的な事例を挙げよう。

「体外離脱後の存在様式は、肉体とは別の体というよりも電磁場に似ていた。」(10)

「臨死体験は我々の周囲にある広大なエネルギー場で生じる。」(11)

「暗いトンネルを通過中、エネルギー場を私は感じた。自分自身の存在はエネルギー場であった。」(12)

光の世界は場で構成されているとする事例もある。

「光の世界は天の場で構成されていた。」(13)

宇宙に振動する場中の場から構成されていると述べている例もある。(14)

- ④ 脳に局所化すると同時に非局所化する場としての意識

意識が場であれば、振動するエネルギー意識は脳と身体の中に局所化されると同時に、脳と身体をこえて非局所化して存在できる。(不可視の潜在的可能性のとして遍在)

- ① R. Sheldrake は、生物の細胞が持つ遺伝子は身体のどこでも同じなのに、各器官によって違ってくるのは、形態形成場という。見ることもタッチすることもできないが、自己組織化する作用のある場が存在するからであるという。生命体の胚の一部から完全な個体を作ることや損失した部分を元通りに再生することから、形態形成場はどの部分も全体の場との関連の中にあり、全体の場を通して部分の全てが相互作用すると考えている。この形態形成場には磁石の棒を半分に切っても完全な磁石であるように、不可分の

全体性が見られる (ホログラム)。例えば、生体と各器官の関係に見られるように、自己組織化する各々の系は、各部分から構成される全体があり、この各部分は各々より低いレベルの全体であり、上位レベルの形態形成場 (全体性) は下位レベルの形態形成場 (部分) を内包し、入れ子状態のヒエラルキー (ホーラルキー) を形成していて、全体を部分の総和以上のものとしている。

磁場が近くの他の磁場と相互作用するように、形態共鳴が時間と空間の制約を超えて同種のシステム同志の間に生じ、形態形成場はこの形態共鳴によって時間と空間の分離を超えて作用する (非局所化)。非局所性というのは、空間において分離した同一系の二つの粒子が量子場によって連結していることであり、これは通常の空間における場ではなく、多次元の位相空間として表現される。形態形成場は電磁波よりも量子場に近く、D. Bohm の包み込まれた秩序に類似している。形態形成場は形態共鳴によって生じる固有の記憶を含んでおり、集団的な記憶を備えていて、C.ユングの「集団的無意識」と似ている。形態形成場はランダムで確率論的なプロセスにパターンを形成し、カオス理論のアトラクターによって目的に導く。身体形態に関わる形態形成場以外にも、メンタル場や知覚場といった形態場が存在する。磁場が磁石の内部と同時に磁石の外部の周辺にも存在しているように、メンタル場を通じて意識は脳内と同時に脳と身体を超えて、外界や他者に作用し、こうして思考・注意や知覚やコミュニケーションが生まれる。テレパシーや透視といった超感覚も潜在的能力としてその延長線上で考えられる。脳はカオス状態であるが、志向による意味によって (アトラクター) 修正され、形態場が脳と相互作用することによって、カオスにパターンを形成する。(15)

R. Sheldrake によれば、脳は意識と記憶の発生器ではなく、形態形成場との同調器であって、自己意識と記憶は肉体の死後も形態形成場に存続するという。彼によれば、形態形成場は全体として形態形成場の部分を入れ子状態のように内包する階層構造をなしているため、場中の場という構造になっており、脳・肉体を内包し、かつ超越するような意識の場が存在する。彼自身は、体外離脱の事は言及していないが、この点から体外離脱は十分可能と考えられる。

② R.K.C. Forman は神秘体験は意識が肉体を超える場であることを示しており、mind は場のように非局所的で準空間的な性格を持ち、非局所的なアウエアネスと局所的な脳との相互作用によって体験が生じると主張している。磁石のように脳は肉体を超えた場を生み出し、逆に場のような体験はアウエアネスが脳を超えていることを示唆しているという。Forman によれば、脳は脳を超えているアウエアネスを受信し、変換するので、脳はアウエアネスの発生器というよりも、受信器・変換器であり、磁石というよりもテレビ受像器に似ている。(16)

R.K.C. Forman 説で注目になるのは、意識が場のように準空間的な性格を備えているという指摘と、脳がアウエアネスの発生器ではなく、受信器・変換器であるとしている点である。

③ David Kent は、次の R.A.Charman の脳から分離した mind の場説に基づいている。「これらの mind の場は、互いに作用し合って複合的なニューロン磁気全体(自己)を形成する。この3次元のニューロン磁気場は、その場を生成し維持している脳から分離した実在として存在している。それは脳と一つの特性を共有している。それは電磁誘導であり、それによって各々のエネルギーは他に作用可能となる。Mind の座はニューロン磁気場にあり、物質的な脳の分子にはない。」(17)David Kent によれば、mind がエネルギー場であれば mind と肉体(物質)とは相互作用できる。エネルギー場は肉体を生成し、肉体の解体後も場は存続する。個人化した場は自己となる。Mind の場は非物質的な自己となる。場は空間的だが、異なる特性を条件が適用する様々な次元で機能できる。(18)脳は mind の場を維持していない。脳は通常物質界に人間を制約するエージェンシーとして機能する。死によって mind はこの物質界(脳)の制約から解放される。Mind の場は脳の制約を超えるものなので、意識の拡大とレベルアップが生じる。(19)Mind の場は身体のイメージの投射を可能とする。(mind 場の体) (20)Mind 場の体と肉体は共通点は殆どないが、mind は両者のアイデンティティを保証する。Mind の場は肉体時の記憶に基づいて似た形を生成する。mind は思念によって体を生成するので、臨死体験例に見られるように、肉体とは別の新しい体については証言が一致していない。(21)臨死体験はこの物質界と異次元界を往復できることを示している。Mind の場は、この物質界に起源を持つが物質界と同一ではない。異次元の mind の場は、この物質界の mind の場とは異なる。(22)D.Kent 説で重要なのは、脳が意識の制約をしているので、脳から解放されると意識の拡張が生じると、臨死体験例に即して指摘をしている点である。

以上、考察してきたように、意識がテレビ受像器の例えに見られるような場であるとすれば、肉体の死後も個が存続するためには脳に代わる何らかのセンサーが存在しなければならないことになる。その場合、超意識体とか光の体というようなセンサーは固定した形態ではなく、ホログラムメントに対応した流動的な形態である必要がある。

④ Martinus によれば、宇宙は人間の5感を超えて光速で振動している光線で形成された物質からできている。光線で形成された物質(エネルギー)は、意識・思考等で構成された霊の領域を形成している。物質界はこの意識・思考の領域から造られた。物質は濃縮された意識・思考である。また、物体の周りにエネルギー場があるように、身体の周りにもエネルギー場がある。各々の人間が独自のエネルギー場を備えている。このエネルギー場は、根本的に光線で形成された物質(エネルギー)で構成されているので、意識・思考の座はここにある。さらに光線で形成された物質は思念物質なので、情報・記憶・知識・感情・人格のアイデンティティ・倫理等を備えている。このエネルギー場は無限の情報を蓄積することができ、脳はエネルギー場の情報にアクセスする受信器である。さらにこのエネルギー場は生命力の座でもある。従って各々の人間のエネルギー場が、その人間の生命力と全情報の蓄積をしているので、臨死体験に見られるように、肉体を離脱後に人生回顧が起こる。照明灯を消しても、電源は存続しているように、エネ

ルギーは肉体なしでも存在している。肉体が死んでもエネルギー場は存続している。従って、このエネルギー場に座のある自己・意識・思考・記憶・知識・情報等は、死体の死後も存続する。光線で形成された物質（エネルギー）から構成されたエネルギー体として存続する。エネルギー自体は消滅たり生成されたりしないので、エネルギー場も不滅である。人間のエネルギー場は電磁波である。その振動から共振・同調現象が生じる。光線で形成された物質（エネルギー）には、意識・思考等の領域なので、肉体から解放された自己意識は、波長に合う光線で形成された状態へと移行する。臨死体験では、トンネルを通して光の世界へと移行する。また、未知のエネルギー体が思念物質によって様々なリアリティを作る。(23)

この説の弱点は、電磁作用と意識を結びつけるようなデータが今の所ない点にある。意識が電磁作用によって生じるのであれば、なぜコンピュータが意識を持っていないのかという疑問が生じる。

⑤ A.K.マネクエフ説：ホログラフィックな生体エネルギー場

A.K.マネクエフは思考を生み出す構造となっているのは、場の形をとったバイオシステムであり、人間のすべての体験は、生体エネルギー場によって記録され、特別なホログラム状態で保存されていると見ている。放射された場は、その発生源から独立して存在することができることは、例えば送信機がストップしても、電波は入力された情報を運びながら空間を伝播するし、星が消滅しても、その光は物質的には存在していなくても観測対象として存在しつ続けるかのような物体のデータを運びながら、宇宙空間を伝播することから分かる。「身体が減ぶ際に放射され、やはりその中にその身体に関するすべての情報を保存しているような生体エネルギー場が存在する。」このことは肉体が滅亡しても、記憶と人間の個性の担い手である場の情報は消滅しないことを意味している。「発生した生体エネルギー場によって個人の不死を達成できるという問題に取り組むことができる。なぜならば、不死は生体エネルギー場を特別な仕方で固定すれば可能だからである。」(24)

◎ 振動するエネルギー場としての意識と体外離脱

我々は④で意識が脳と相互作用し、脳内に局所化すると同時に脳を超える場として非局所化することを考察したが、自己意識と記憶が体外離脱し、また肉体に戻るという現象のメカニズムと場としての意識との関連については、まだ具体的に解明されていない。そこで、次に場としての意識という視点から体外離脱のメカニズムを解明してみよう。意識が場であれば、脳内に意識が局所化して存在していることが分かると同時に、脳を超えた所にも意識が存在していることが分かっても良いわけだが、実際には通常は意識は脳内にあると感じているだけで、体外離脱は稀にしか起こらず、生じても脳内と脳の外に同時に意識があると感じることはない。脳が場としての意識を脳内に何らかの仕方で局所化させる機能がなければ、このような現象は説明できないであろう。また、意識は脳内に局所化された時は、意識と脳は相互作用できるが、意識が脳の外に非局所化された時には、臨死体

験の事例によれば、意識は物質界のもの（人間も含めて）一切相互作用ができない点は、単に意識を場と考えるだけでは説明できない。

① M.タルボットによれば、人間のエネルギーの場の精妙な振動エネルギーは、原子を超えた存在である。原子を超えた量子のレベルには、未知の多くの微細なエネルギー場がある。(25)通常我々は、人間の身体と脳と意識は段階的にその精妙さを増していくエネルギー場の連続体であり、ホログラムであるとするれば、人間存在は光の放つエネルギーの霊のようなものとして現出し、空間におけるその位置も曖昧なものではなくなる。(26)意識が場であれば、意識が肉体の内部に閉じ込められているとは限らず、肉体を超えた存在、時には肉体から離脱することも可能である。体外離脱はエネルギー場の現象であり、究極的には人間は波動現象であって波動領域の壮大なマトリックスの中に包み込まれた未知の振動エネルギーのパターンに他ならない。(27)

タルボット説の弱点は、なぜ通常は意識が脳内にあると皆感じており、体外離脱は稀にしか起こらないのかが説明されていない点である。

② M.タルボットに近い見解を唱えているのは、V.Hunt である。V.Hunt は生体エネルギー場を流れる微弱電流と脳波を同時に計測し、外部から刺激を与えるとエネルギー場の方が必ず脳波よりも前に反応することを発見し、このことは脳はコンピュータであって、心の要素は脳ではなくエネルギー場の方にあることを示していると主張している。(28)意識が場であるということは、意識が肉体と脳を超えて周囲に広がっているということである。V.Hunt によれば、人間のエネルギー場の精妙な振動エネルギーは量子レベルにあり、微細エネルギー場が D. Bohm の唱える「包み込まれた秩序にあり、このエネルギー場は非局所性を備えている。」(29)究極的には人間は心が様々なホログラムな形態に変換している波動現象である。(30)生体エネルギー場にはホログラフィックな性格があり、ホログラムの中の情報と同様にエネルギー場は身体全体に分散している。霊的レベルの高い人は、通常の人よりも高い周波数を備えており、900 サイクルを超える周波数を備えている人は神秘的な人と見られる。(31)人間の意識は脳の中にあるのではなく、肉体に浸透し、その周りを包んでいるプラズマ・エネルギーの方にある。(32)V.Hunt によると、電極磁力を人体のチャクラに当てて電磁場を測定すると、頭頂部から高い周波数が記録されたが、腰から下では振動は記録されなかった。また、頭部でのみ振動の極めて上限において極めて狭い結合があるということから、通常物質からエーテルにシフトしても不思議ではないという。(33)V.Hunt はアウエアネスがその人の身体の内にあるか外にあるかはその人のアウエアネス次第であって、mind が肉体から分離してしまう訳ではなく、アウエアネスをどこに集中させるかによって mind の場を肉体の内にも外にも体験されるとしている。従って体外離脱は意識の周波数と位置がシフトした体験であり、単に意識が特定の物質レベルとは直接結合してはいないだけであると解いている。(34)体外離脱しても意識と肉体が完全に分離してしまっている訳ではないことは、臨死体験の多くの事例では体外離脱後、あるいはバリヤを超えると二度とも肉体に戻ることができないと報告されている点や、銀の紐のよう

なもので肉体と未知の意識体が結合しているという例からも明らかであろう。M.タルボット説と同様、V.Huntの説ではなぜ体外離脱は稀にしか生じず、通常は脳と身体内に意識があると思っているのかという点が説明されていない。脳の周波数の違いだけで体外離脱は説明できるかという問題もある。

③ 体外離脱は気場である

「気」は、体の周りを幾重にも取り囲んでエネルギーバンドのようなものにもなる。「気」と心は密接に結びついているのだから、「気」のエネルギーバンドに心が移行する。気そのものが心となり、物質形成場として体外に移行するのが体外離脱である。(35)

④ 脳による意識の局所化説と体外離脱

本来意識は場であるが、通常は脳内に局所化していると感じているという事実と体外離脱現象を考えると、脳が通常は意識が脳内に局所化させて知覚を制約している何らかの機能を課していて、その脳の機能がなくなると自己意識が体外に離脱するという現象が起こるものと考えられる。体外離脱後も意識はバリヤを超えるまでは、脳と肉体と完全に関係が切れてしまう訳ではなく、何らかの仕方で（銀の紐を通じて）両者の関係は保持されているので、自己意識は再び肉体に戻ることができる。

① ここで注目しているのは、D.H.Lundの説である。D.H.Lundは、意識の場の中で知覚を通じて全てのものが脳と身体も含めて構成されているが、脳が縮小するヴァルヴ作用によって意識が脳と肉体内に局所化させ、知覚を制約していると主張している。従って体外離脱は脳のフィルター作用から解放されて、意識が脳内に局所化しているのではなく、脳と肉体の方が脳と肉体を超えた意識の場の中にあるということを感じさせるだけであると唱えている。(36)しかし、D.H.dund説では、脳内に局所化した時には脳は相互作用できる意識が臨死体験の事例が示しているように、なぜ脳の外に非局所化された時には、物質と一切相互作用できなくなるのかについては何も説明されていない。

② G. Dharmawardenaは、C.McGinnの説を採用し、特性Pによって脳が意識の基礎となり、意識は量子のコヒーレントな非局所的連関という脳の特性Pを通じて脳に局所化し、脳と相互作用すると解している。意識は量子力学的な実在であり、脳の特性Pが脳と相互作用し、脳内で機能するための量子力学的基礎を提供している場合には、意識は人間の脳内に局所化できる。脳と意識は、脳と非局所性が支配する量子レベルと関連させる特性Pによって結び付けられる。これは電子が原子核の周りの電磁場との量子力学的な相互作用によって、原子の量子状態のエネルギーが電子によって所有されたエネルギーとマッチしている限りは、原子内部に局所化されているのとアナロジーである。しかし、脳の特性Pが崩壊すると、意識は脳から離脱し浮揚する。この時、意識は肉体と統合されていた時の記憶の一部を持っていく。これは原子核の周りの電磁場との量子力学的な相互作用によって、電子が余分のエネルギーを獲得して電子エネルギーがマッチ

しなくなると、他のマッチする状態にシフトするか、あるいは原子を離脱し自由な電子として浮揚した存在となるのとアナロジーである。脳の特性 P が回復すると、意識は脳に再び戻ることができる。(37)

この説で注目しているのは、脳と意識を結合させる特性 P が量子力学的な性格を備えているという点である。その特性 P が崩壊すると意識は物質と相互作用できなくなると見られている。

- ③ 体外離脱の具体的な例と最も密に分析して考察しているのは、**J.K.Arnette** である。

J.K.Arnette は脳・肉体（物質界）と **essence**（肉体から分離した意識・非物質界）という二元論の立場から、脳・肉体の電場と **essence** の電場の相互作用によって通常の意識が生じ、両方の電場がオーバーラップしない両者の電場の部分に無意識があるとしている。(38)**J.K.Arnette** によれば、蘇生処置の電気ショックによって体外離脱していた **essence** が再び肉体に戻るという多くの臨死体験の事例は、**essence** と肉体を統合する力が電磁気であるためには **essence** が空間的に拡大された電磁場と関連している必要があるが、**essence** が電磁气的性格を備えているという臨死体験の事例がある。肉体と **essence** の電場は、電気双極子によって生じ、二つの双極子が平行かつ向きが反対の場合には引き付け合い、平行かつ向きが同じ場合には反発し合う。(39)**J.K.Arnette** は体外離脱のメカニズムを直接説明していないが、この後半の内容で体外離脱のメカニズムを説明できよう。**J.K.Arnette** によれば、二つの肉体の双極子が平行かつ向きが反対の場合も二つの双極子は引き合うが、質量から構成されている物質の排他的な性質によって停止される。一方の双極子が物質でない場合には、二つの双極子は同じ空間を占め、この重ね合わせの結果として双極子の場は互いにキャンセルとなり、合成されたものは引き合ったり反発したりする電磁力を作用させないので、体外離脱した **essence** は地上の生きた人間（肉体と **essence** の統合体）と相互作用できない。(40)

この **J.K.Arnette** の見解は、地上の生きた人間が体外離脱した **essence** を見ることも聞くこともタッチすることもできず素通りしてしまい、**essence** の方も地上の生きた人間と交信したり、タッチすることもできないことは説明できるが、なぜ **essence** の方は地上のものを（人間を含めて）見たり聞いたりすることができるのかが説明できない。

J.K.Arnette によれば、**essence** は臨死体験者の肉体とは特別の仕方で波長を合わせることができるので、肉体に再び戻ることができる。各々の肉体は特徴のある場（電磁指紋）を生成し、この場 **essence** は同調できる。（例えば、テレビの電波は人体を素通りしてしまうが、周波数を合わせた受信器によってキャッチされるように。）また、**J.K.Arnette** は、脳の電場と **essence** の電場の相互作用によって **essence** の知覚能力が弱められるという脳による縮小ヴァルヴ説を唱えている。

以上の考察を終えたので、最後に結論をまとめてみよう。

- ① 意識を振動するエネルギー場と考えるモデルによって、意識は脳と相互作用し、脳内に局所化することが可能となる。

- ② また、意識を振動するエネルギー場と考えることによって意識が脳を超えて非局所化して存在することが可能となる。また、意識は脳から独立して存在することもできる。
- ③ 脳は意識の発生器ではなく、場としての意識を受信し、変換し、脳内に意識を局所化する装置である。
- ④ 脳による局所化から解放されれば、意識は脳と肉体から解放され、振動するエネルギー場として非局所化される（体外離脱）。
- ⑤ 意識と脳の相互作用を可能にし、両者を結合させているのは量子力学的な性格と思われる。これが崩壊すれば、脳（物質）と意識は相互作用できなくなる。
- ⑥ 体外離脱現象が振動するエネルギーとしての意識の出来事であれば、体外離脱後の空間上の特定の視点とテレポテーションする空間上の特定の位置が瞬間に移動するのも、非局所的な場中での局所化（粒子化）説が固定的ではなく、振動数によって瞬時にシフトするためである。
- ⑦ しかし、意識の場のモデルだけでは、なぜ体外離脱した時に必ず上から未知の超意識体は地上の人間をタッチすることも交信することもできないにもかかわらず、地上の人間を見、人間の言うことが聞こえるのかが解明されないままに残されている。これは、5次元説によってのみ解決されるように思われるが、5次元説と入れ子式ハイアラキー（ホーラルキー）構造については、稿をあらためて論じる。
- ⑧ 5次元界の非狂句在意識の普遍的統一場の中に肉体意識が局所的に存在すると考えられる。脳は場中の周波数をダウンさせて全体意識を4次元時空連続体の肉体内に閉じ込めるため、通常の個人意識は肉体（脳）内にあると感じられる。脳による制約がなくなると、個人意識（局所意識）は肉体を超えて拡大し、本来の全体意識と一つになり、この時肉体が宇宙意識という普遍的統一場の中にあることが分かる。全体意識は時間と空間のバリヤを超えて宇宙と一体となった非局所意識であるが、臨死体験の事例で明らかのように、肉体から解放された後も、必ずどこか特定の所に視点があって、そこから全ての空間と時間を見たり体験したりしている。（テレポテーションも含めて）このことは5次元界の全体意識の普遍的統一場の中にも個があって、その個は完全な知覚や全情報（全知・記憶）や、思考や感情等を備えた非局在意識体（光の体）であり、この個は全体意識という全体と不可分の仕方で一つに統合されている（コヒーレンス）ので、全体意識という普遍的統一場の振動する焦点のように、固定したものではなく絶えず周波数をシフトすることによって、移動し変容することを示している。（D. Bohm のホロムーヴメント）脳の制約から解放されると、周波数をアップして個人意識（局所心意識）は意識を拡張し、全体意識（非局所意識）と一体となり、脳に制約されると周波数ダウンして肉体内の個人意識（局所意識）へと収縮するものと考えられる。これは、量子の波動関数の収縮の現れと見ることもできよう。これらのことが正しければ、個人意識（局所意識）

は全体意識という普遍的統一場の中の焦点（粒子）ということになり、ホーラルキー（階層的ホロン）を構成していることが分かる。

- ⑨ チンパンジーと人間の DNA は 99.9%同じであると言われているが、おそらく人間の脳は動物の中で普遍的統一場の全体意識と共振できる唯一の動物である可能性があろう。これが自己意識のコアであると思われる。コンピュータを始め、どんなに精密な電気装置も人間と同じ意識は備えておらず、全体意識と共振したり、臨死体験をすることはないものと思われる。

註

- 1) 「脳死と臨死体験の記憶」の項
「先天性全盲者の臨死体験」の項
- 2) 「夢（幻覚）と体外離脱について」「体外離脱体験は幻覚か」「確証された臨死体験の知覚」の項
- 3) The Miracles of Existence, OxBrow Press, 1984, 87
- 4) Miracles, 95^97
- 5) J.C. エックルス・D.N. ロビンソン、心は脳を超える、紀伊国屋、1989, 239~242
- 6) J.C. エックルス、自己はどのようにして脳をコントロールするのか、シュピリンガー・フェアラー東京、1998, 4.5.9 章
- 7) B. Libet, A testable field theory of mind-brain interaction, Journal of Consciousness Studies, 1, 1994, 120~121
- 8) [http://pw1.net.com/~wolfpapers/myarticles/Q&A for Deepah.pdf](http://pw1.net.com/~wolfpapers/myarticles/Q&A%20for%20Deepah.pdf)
- 9) A.L. Lansky, Consciousness as an active force, www.reresearch.com/consciousness.html
- 10) C. Green, Out-of-the-Body Experiences, Institute of Psychophysical Research, 1968, 32
- 11) [www.nderf.org/Karen-H's NDE.htm](http://www.nderf.org/Karen-H's%20NDE.htm)
- 12) [www.nderf.org/Gina's NDE.htm](http://www.nderf.org/Gina's%20NDE.htm)
- 13) H. Dougherty, Fast Lane to Heaven, Hampton Road Publishing Company, 2001, 31
- 14) K. Ring, Lessons From The Light, Insight Books, 1998, 290
- 15) R. シェルドレイク、形態共鳴、S. グロフ編、個を超えるパラダイム所収、平河出版社、東京、160~185; 同、あなたの帰りがわかる犬、工作舎、2003, 389~409; R. Sheldrake, Can our memories survive the death of brains? In G. Doore (ed) What Survive?, Jeremy P. Tarcher, 1990, 111~121
- 16) What does mysticism have to teach as about consciousness?, Journal of Consciousness Studies, vol5 no2, 1998, 197
- 17) The field substance of mind, Network 63, 1997, 12~13
- 18) The Phenomenology of NDE, chap.9 p.3

- 19) 同書、chap.9 p.7
- 20) 同書、chap.9 p.8
- 21) 同書、chap.9 pp8~9
- 22) 同書、chap.10
- 23) Elve Byskov,Martinus on the Survival of Consciousness,Vital Signs,vol23
no4,2004,5~6.11
- 24) A.ゴルボフスキー、異界、新読書社、1994,131
- 25) ホログラフィック・ユニヴァース、春秋社、1994,240
- 26) 同書、258
- 27) 同書、340
- 28) M.タルボット、ユニヴァース、259~260
- 29)同書、240~241
- 30) 同書、322~323
- 31) 同書、236~237
- 32) 同書、323
- 33) Infinite Mind,Malibu Publishing Co.,1996,127
- 34) Mind,96
- 35) 佐々木茂美、気がもっとわかる本、ごま書房、1992,182
- 36) Death and Consiousness,McForland & Company,1985,90~94
- 37)A quantum mechanical model of the brain and
consciousness,www.lanka.com/dhamma/miss/science4.htm
- 38) On the mind/body problem:the theory of essence 2,Journal of Near-Death
Studies,vol14,1995,95
- 39) 同書、88
- 40) 同書、89